

## ウサギも風邪をひくのかな？

風邪ってどんな病気？

「風邪」を私の好きな『新明解国語辞典』で引いてみると「薄着したり、汗をかいたりしたあと、寒気がし、むやみに鼻水・くしゃみ・せきが出たりノドが痛くなったりする症状」と書いてあります。つまり風邪という病名はないのです。

では、どんな病気で風邪の症状になるのでしょうか。

一番多いのは、スナッフル（鼻風邪）と呼ばれていて、主としてパスツレラ・マルトシダという細菌によって鼻炎が起こるパスツレラ症です。感染のルートは、細菌のついたくしゃみの飛沫を吸い込んだり、鼻汁に触れたりして移っていきます。涙が多くなる病気であっても、涙管から鼻に涙が伝わるので、鼻汁やくしゃみが出ます。結膜炎や角膜炎および涙のう炎などです。臼歯の不正咬合などでも涙や目やにが多く出る症状になることがあります。

人の場合と同じに「風邪は万病のもと」といわれるように、あなどっていると首が傾く斜頸や肺炎などを起こしたり、免疫力が落ちて腸炎や脳炎に進むこともあります。食欲が落ちたりする前に病院へ行き、適切な治療を受けましょう。

風邪のときの症状

### 1 鼻汁・くしゃみ

上部気道と呼ばれる鼻腔・副鼻腔・ノドなどで細菌が増えて炎症が起きるとドロツとした鼻汁が出るため、鼻の周りが汚れます。

### 2 前肢の汚れ

鼻の汚れが気になって前肢でこするため、前肢が汚れてゴワゴワになることがあります。

### 3 呼吸困難

鼻がつまると呼吸が苦しくなり、努力呼吸（一生懸命、必死で呼吸すること）をするようになります。食欲や元気もなくなり、寝てばかりいるようになります。肺や気管もやられることがあります。

### 4 結膜炎

さらっとした涙のような目やにや粘り気のある膿のような目やにが出たり、まぶたや結膜が赤くなったり腫れたりします。ひどくなると目の周りの毛が抜けたりします。

## 5 無症状

恐いのは不顕性感染といって、パストレラ菌などを持っているのに、風邪の症状はひとつもなく、病原体をばらまいているウサギがいることです。

## 風邪に対する治療

広域抗生物質のほか、食欲増進剤、経口の高栄養素、輸液、点眼薬などを使って治療しますが、パストレラ菌などがいると完治しにくい病気です。慢性化することが多いので、症状がとれた後も長期に薬を使ったり、定期的な検診が必要です。

経過がすっきりしないときや症状がひどいときは、どの薬が菌が増えるのを抑えることができるかという「抗生剤感受性試験」をして薬を選んで治療します。

抗生剤とともに、生菌（乳酸菌、酪酸菌など）製剤も投与しておく、腸内の正常細菌叢のバランスがくずれにくいので安心です。

体力・抵抗力・免疫力が落ちないように、適切な食事・保温などで二次感染を防ぎましょう。

目の症状やくしゃみから、パストレラ症のことばかり心配していると、案外歯が原因のこともあります。その場合は、歯の不正咬合などを治さないといつまでたっても症状はなくなるので注意しましょう。

家の人のきめ細やかな観察も私たちの判断以上に大切ですので、総合的な治療ができるよう、気づいたことは小さなことでもかかりつけの獣医師に伝えましょう。

## 風邪の予防

1 ウサギを飼い始めるときは、飼われていた家や店のウサギのなかに、風邪の症状（パストレラ症）のものがいないかをチェックしてからにしましょう。できれば動物病院で鼻の分泌物の中にパストレラ菌がいないか調べてもらえば安心でしょう。

2 早期発見のチェックポイントとして、周りや前肢（前足）の汚れに注意しましょう。

3 体の抵抗力が落ちないように、ケージ内の環境や飼育状況をよくすることも大切です。温度差を小さくし、すき間風を防ぎ、湿度を適正に保ち、換気をよくしましょう。

4 無症状でパスツレラ菌をばらまくウサギもいますので、完全に防ぐのはむずかしいのですが、風邪の症状を出しているウサギはくしゃみ・鼻汁を介して病気を広める可能性がありますから、できれば隔離したほうがよいでしょう。

5 多頭飼育は、この病気の感染率も高くなるばかりかストレスも多くなり、飼育管理も行き届かなくなり、病気のひきがねになります。

必要以上増えないよう、避妊手術・去勢手術・オスとメスの分離などで、バースコントロール（出産の制限）をしましょう。

#### コラム 世界に一冊

「宅配便です。ハンコお願いしまーす」

5 kg のどっしりした荷物、本らしき感触です。開けてみると『小動物の臨床栄養学』。10 年ぶりに改訂版の本が出たのです。ナ、ナ、ナント、友だちが2万5千円もするものをプレゼントしてくれたのでした。

感謝、感激！ 本の周囲と行間に「しっかり読んで勉強を積み重ねること」という文字が見えるようです。早速、10 年前の版と比べてみました。

大きく違うところは、エキゾチックアニマルが入っていることです。昔は犬、猫しか出ていませんでした。

フェレット、ウサギ、チンチラ、スナネズミ、ラット、ハムスターのキーポイントが17項目も出ています。栄養学中心と思いきや、臨床という言葉がただあってなかなか実践的な本で、ワクワクしてきました。

ウサギの項目の1074ページをデーンと開けてみました(ホントにため息が出るほど、重くて大きな本なの)。アメリカのことですが「ウサギはペットとしてポピュラーになってきており、獣医療への要求も高まっている」と書いてあります。へー、日本と同じだとなんだか嬉しくなりました。

飼育管理・主要栄養因子・栄養に関する特記事項・栄養性疾患（不正咬合、胃毛球、粘液性腸症、腸管毒血症、肥満、ビタミン欠乏症とビタミン中毒）・給餌計画が出ています。

私がいちばんおもしろいと思ったのは、次の指摘でした。「ウサギの消化生理の特性の中で臨床に最も関わりの深いのは、ぜん動の始まりが胃からではなく、十二指腸の後ろの方空腸から始まることである。この特性によりウサギは毛が胃に蓄積しやすく、胃毛球や胃停滞を起こしやすくしていると考えられる」

科学的な裏付けを知ると十分に納得できるものです。馬と似た消化システムで、ウサギの盲腸は胃の十倍もあるのです。そういえば馬には仙痛といって盲腸に急にガスがパンパ

ンに溜まることがあります。実習に行った北海道の牧場で、夜中に「急患だぞ」と起こされたことを思い出しました。

工夫の好きな夫は「これを世界に1冊の本にするぞ」と、見出しや付録や動物の種別に、本のページに切り込みやマークを入れました。厚さ10cm程の本が、見やすく検索しやすい本になったのです。プレゼントしてくれた友だちに見せたいくらい、とあっていましたら「オイ、読み切れなくなって枕にしたり、イスにしたりするなよォ」と電話がかかってきました。即座にこう答えました。「大丈夫、10万円の本にアップしたよ」